

日本労働年鑑 第59集 1989年版
The Labour Year Book of Japan 1989

第四部 労働組合と政治・社会運動

II 社会運動の動向

概況

☆第五九回メーデーは、全国一二二〇カ所に三六〇万人が参加しておこなわれ、統一集会は前年より一県ふえて三八都道府県と史上最高となった。しかし、メーデー実行委員会内では、メイン・スローガンをめぐって対立、労戦統一をめぐると対立図式がそのまま影を落としている。

☆政府・自民党は前年の売上税にひきつづき、消費税という形で大型の新間接税の導入をはかった。政府・自民党のたくみな戦術もあって、業界団体の反対運動は押さえこまれ、野党の足並みも乱れた結果、消費税の導入を許すこととなった。

☆八八年の天皇の手術・入院以来、にわかにXデー論議が活発になった。この間、異常なほどの天皇報道と「自粛」ムードが列島全体をおおったが、天皇制や戦争責任、あるいはマスコミ報道のあり方などをめぐって、各種の社会運動団体をはじめ、広く草の根レベルでの議論や運動が展開された。

☆「広瀬隆現象」という言葉が生まれるほど、八八年の社会運動のなかで顕著な広がりや高揚をみせたのが、原発反対運動であった。原発問題への関心は、いまやお茶の間にまで広がっており、原発推進側は新たな対応を迫られることになった。

☆反核・原水禁運動は、一方では多様で豊富なものになっているが、他方ではますます分裂を深めている。六年ぶりに開催されたSSDⅢに、わが国は統一代表団を派遣することはできなかったが、他方、新たな反核運動としての非核自治体運動は宣言都市の数で世界一となり、注目をあびている。

日本労働年鑑 第59集

発行 1989年6月26日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑第59集【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)